

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370106

研究課題名(和文) 隸書再発現のメカニズム - 中国中世期の石刻資料を端緒として -

研究課題名(英文) Mechanism of Official script re-appearance - The stone tablet in a Chinese Middle ages is made a starting point.

研究代表者

東 賢司 (HIGASHI, Kenji)

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：10264318

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：資料収集の結果、南北朝は1800件、83万字、隋代は800件、31万字に増加した。墓葬の多い洛陽、(業+おおざと)(現在の河北省磁県南)、西安に注目した結果、(業+おおざと)城付近は北魏でほぼ見られなくなっていた隸書が、540年頃から復活する。ここが「紫陌」と称される地点である。また、隋代になると、墓誌銘が激減していた洛陽で、再度隸書墓誌銘が作られるようになり、完成度の高いものが含まれるようになった。同時期には西安で楷書の優品が作成される。隸書の知識を持った者が、(業+おおざと)から移動し、洛陽や西安で作成するようになったのではないかとと思われる。

研究成果の概要(英文)：As a result of the resource acquisition, Southern and Northern Dynasties are 1800 cases and 830,000 letters, Sui are 800 cases and 310,000 letters. After I paid attention to Luo Yang, Ye, Xi An, around Sui Castle, Official script which wasn't seen any more mostly in Northern Wei, I restore from around 540. This is the spot called "Zi Mo". In Sui at Luo Yang where an epitaph signature decreased sharply, Official script works start to be made once again, something with the high percentage of completion started to be included. In Xi An, excellent works are made in a simultaneous period. A person with knowledge of official script moves from Ye, it seems maybe to have started to make it in Luo Yang and Xi An.

研究分野：書道

キーワード：隸書 墓誌銘 洛陽 業+おおざと 楷書 南北朝 隋 紫陌

1. 研究開始当初の背景

(1)国内・国外の研究動向

近年、中国での石刻資料の専著は増加傾向にあるが、簡牘と比較すると石刻資料への注目度は低いと言わざるを得ない。北魏洛陽と隋建康(南京)、唐長安(西安)という巨大王朝に挟まれた東魏・北齊時代の都である鄴についての研究や書法については紹介論的なものが多く、分析・統計を主体とした研究は少ない。

(2)着想の経緯

長江の水を中国北部に運ぶ「南水北調」により、河北省石家荘市周辺でも、大規模な工事が進み、多くの遺址が発掘されている。これらの中には、隸書の文字を散見することができる。河北省磁県周辺は、旧都「鄴」の影響で、東魏・北齊の遺址が多く発掘されている。この時期は、「楷書の洗練」という書体・書風が美的な一方向に向かう集約期に当たるとされるが、復古的な書が流行する理由は明らかにされていない。

2. 研究の目的

(1)隸書書体への復古の理由

鄴を中心とする北魏相州への文化人流入と復古的思想の実態を解明し、その結果、そこに残されている書にも復古の影響を及ぼしたことを証明する。

(2)女性記録と婚姻による閭閻構築の解明

墓誌・造像記によって、女性の人名を1000人単位で明らかにし、その婚姻による閭閻作りの実際を確認し、文化的伝播の基礎となる人の繋がりを明らかにする。

(3)鄴の高文化水準の証明

洛陽(河南)・鄭州(河南)・済南(山東)・石家荘(河北)から200キロ圏内に位置する地理的環境的な優位性から発展した鄴の都の文化度を、書と特定文化人の繋がりに証明する。

3. 研究の方法

(1)出土報告書などの文献資料を手がかりに、河北省磁県を中心に半径400キロにある遺址、文物保管所を調査する、データベースの作成の他、遺址情報を正しく把握するためのGPS測定と地図化を行う。

(2)多層的な構造分析を行い、人物の移動や閭閻、書法との関連性等の組織分析を実施する、また、系図プログラムにより人の繋がりを可視化する。

(3)洛陽から鄴に遷都を行った結果、新しい文化が生まれている。石刻資料においても「隸書」という書体が再登場するののも一つの現象である。隸書は後漢末をピークに激減し、北魏洛陽時期には殆ど見られなくなる。数百年前の隸書が復活するようになった原因を都

城の共通性だけではなく、人の繋がりによる文化の流入、鄴の位置的な優位性を論じて、楷書の時代に隸書が使用されるメカニズムを特定する。

4. 研究成果

(1)電子データ資料の充実について

現地調査

期間中、整備されてまもない河北省の磁県南部の鄴城を訪問するなど、河南省・河北省・陝西省の博物館や遺跡を訪問し、出土品の資料収集を行った。写真などは資料庫に保存し、また、現地調査で得られたGPSのデータや、系図資料等も分量を増加させることができた。

石刻資料データベースの推進

更に、墓誌銘資料を中心に石刻資料の充実を計ることができた。書籍、報告書、拓本資料等から得られた合計数量としては、従来から構築を勧めている南北朝資料のデータベースでは、資料数が1,800件、電子化した文字資料は約31万字になった。

隋代石刻資料データベースの構築

また新たに隋代の石刻資料データベースを立ち上げ、画像等の検索を容易にした。資料数は約800件、電子化できた文字資料は約31万字になった。石刻における出土資料の体系的な電子化作業は他にあまり例がないと思われる。

(2)鄴城周辺に見られる東魏・北齊の隸書墓誌銘再発現の地点について

①鄴の地理的な特徴

東魏・北齊の墓葬は、鄴城の西に広く作成されている。現在でもその墳墓の痕跡を確認することができる地点が残っているという点は、北朝の大規模な墳墓が発見されている洛陽や西安と大きく異なる。

隸書墓誌銘の出現地

調査の結果、鄴城西の埋葬のポイントは、豹祠や紫陌と呼ばれる何カ所かに集中していることがわかった。また、隸書の墓誌銘については、東魏541年から548年までの間に隸書資料が集中的に見られる。この事象は、洛陽や西安では見られないことであり、紫陌の南部が早期の隸書墓誌銘の集積地点と断定できた。

墓誌の書者に関する特徴

この地域のみ東魏から隸書作例が見られることを考えると、墓主の一族等に意識的に隸書を使用しようとする意志と書体的な知識を持った者が存在したことが推測できる。

④北魏から鄴への技術伝承

墓誌は鄴への遷都直後から作製され始めるが、遷都後5年ほどは北魏の影響を受けた

と思われる楷書資料ばかりであるが、540年代になると、一気に隷書資料が見られるようになってくる。紫陌周辺の墓誌資料では、一部に完成度の高い作例も見られることから、古くからの隷書の書法技術が何らかの形で残されていた可能性がある。

(3) 西安に見られる隋代隷書墓誌銘の特徴について

洛陽地域の墓誌作成の衰退

隋代の隷書墓誌銘が多く埋葬されたのは河南省洛陽市である。これは洛陽に都があった北魏以来の傾向であるが、一次的に墓誌は洛陽では作成が激減する。これは遷都が行われ多くの民が移動したのと同じく、墓誌を作る職人達が洛陽を離れたためと思われる。

墓誌作成集団の移動

北齊と北周が対峙する戦乱の渦中にある洛陽で墓誌を作製することは困難が予想されるが、それでも若干の資料が残されている。墓誌の優品を作製するには優秀な職人が必要だが、時代が隋に変わり、経済活動や文化活動の中心が長安に移ると、その中心地を目指して移動してきた集団に技術力の高い職人が含まれていたと推測される。

隷書墓誌銘の技術伝承と環境整備

南北朝後半に一旦途切れかけた隷書という書法についても、徐々に書者の技能が深まり、時間の経過とともに質の高い作品を作ることができる環境が整ってきたと予想できる。

隋代の隷書墓誌銘の増加

隷書の墓誌銘については、開皇年間の途中から優品が見られるようになり、仁寿年間の終わりまで途切れることなく続いている。

洛陽と隷書墓誌銘

書的な観察の結果、隷書の優品資料は河南省洛陽出土のものが多いことが認められた。

西安と楷書墓誌銘

比較の対象として取り上げた楷書の優品は、陝西省西安を中心とする地域で作成されたことがわかり、明確な区分ができることがわかった。

地域差発生の原因

このような書体による地域差が発生した原因は、河南省においては、北齊出身の者により隷書作成の風潮が洛陽に持ち込まれ、更に技術を発展させて隋代的な優品が作られる一方、陝西省においては北周出身者により楷書使用の傾向が長安に引き継がれた可能性があるということを指摘した。

(4) 書的に優れた石刻資料の選定の基準

作品の評価基準の作成

書の長年の鑑賞方法として、「鑑賞を行った文人等が跋を書き、後生の人はいそれらによって書の評価が定められてきた」という伝統的な思考が支配的であり、現在も継続している。このことは、優品や名品を分析するための妨げになりがちであった。このため、書作品そのものを分析的に見るための評価基準を以下のように定めた。

楷書の石刻資料の分析基準

楷書の場合、以下の四点を基準とし、ゆがみが少なく、文字の中の空間を一定間隔で分割し、極端な狭広は見られない。また、画数の多い文字も少ない文字も同じ大きさで書き、行間や時間にぶれがない、また洗練された印象があるものを選定した。

A 彫刻の技術に優れ、点画に緩みやゆがみがない。

B 点画の方向が一定に保たれている。

C 文字の大きさが一定である。

D 字間・行間が均しく保たれている。

隷書の石刻資料の分析基準

また、隷書の場合、以下の三点を基準とし、ゆがみ、波磔、画の太さ、文字の大きさによっていびつな空間が生まれず、洗練されたものを選定した。

A 点画の彫刻が正確で、行間や字間が均等に保たれる。

B 点画の中の空間を一定間隔で分割し、極端な広狭は見られない。

C 文字の大きさが一定であり、重心がずれない。

(5) 学会発表

平成 26 年に開催された全国大学書道学会埼玉大会では「鄴城に見られる東魏・北齊墓誌の出土地及び隷書再発現の具体的地点」と題した研究発表を行った。東魏・北齊の墓誌は鄴城聖域に広く分布していること、東魏時代の隷書墓誌銘発見地点は、紫陌の南部であることを中心に報告した。

また、平成 27 年度に開催された全国大学書道学会横浜大会では「隋代に見られる隷書墓誌銘について」と題した研究発表を行い、楷書の優品 30 点と隷書の優品 21 点を具体的に挙げ、それらの文字的な特徴をあげた。また、隋の人間が見たと思われる漢代の隷書資料について石経の移動についての史実を追い、隷書の伝播の可能性を指摘した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

東賢司、隋代に見られる隷書墓誌銘の特徴と書法伝播、大学書道研究、査読有、第 9 号、2016、41-52

東賢司、墓誌銘資料の教育的活用、愛媛大学書道研究、査読無、第6号、2016、1-19

東賢司、鄴城周辺に見られる東魏・北齊墓誌の出土地及び隸書再発現の具体的地点、大学書道研究、査読有、第8号、2015、87-99

東賢司、山東省出土の墓誌 東清崔氏の墓誌、愛媛大学書道研究、査読無、第5号、2015、12-31

東賢司、山東省出土の墓誌 賈思伯墓誌の記述内容と書法、愛媛大学書道研究、査読無、第5号、2015、1-11

東賢司、中国六世紀の墓誌銘の四言詩句に見られる字句と書風の伝承、大学書道研究、査読有、第7号、2014、51-62

東賢司、魏晉南北朝時代の墓誌銘に見られる異体字について、愛媛大学書道研究、査読無、第4号、2014、1-19

〔学会発表〕(計3件)

東賢司、隋代に見られる隸書墓誌銘について、全国大学書道学会横浜大会、2015年10月10日、横浜国立大学

東賢司、鄴城周辺に見られる東魏・北齊墓誌の出土地及び隸書再発現の具体的地点、全国大学書道学会埼玉大会、2014年10月11日、埼玉大学

東賢司、中国六世紀の墓誌銘の四言詩句に見られる字句と書風の伝承、全国大学書道学会群馬大会、2013年10月5日、群馬大学

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.geocities.jp/youshinden/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

東賢司 (HIGASHI, Kenji)

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：10264318